

### 3年間のまとめ(病理班)

乳幼児突然死症候群(SIDS)は通常の剖検によっても有意の病像が認められないことが多い。この理由として、詳細な組織学的検索によってのみ解明できるような病変が存在しているのか、あるいは機能的障害が加わって突然死に到ったものであることが推定される。病理班としては心臓における形態学的変化を中心に、気管支、肺および中枢神経系についての研究を行ってきた。

昭和56年度は、(1)東京都監察医務院におけるSIDS剖検例の現況。(2)心刺戟伝導系の病理学組織学的検索と新生児、乳幼児の心筋の発達状況。(3)心刺戟伝導系の脂質生化学的研究。について検討した。

昭和57年度は、(1)SIDS例の心刺戟伝導系の病理組織学的検討。(2)SIDS例の気管支肺胞系の病理組織学的検討。(3)SIDS例の中枢神経系の発達神経病理学的立場からの病理組織学的検討。(4)心筋の糖脂質の分析。について検討した。

また、狭義のSIDSの病理学的診断基準(案)を作成した。

昭和58年度は、(1)乳幼児の冠動脈の内膜病変と心刺戟伝導系の関連。(2)心筋の分離秤量による右室・左室比について。(3)SIDS本態に関する神経病理学的研究(とくに低酸素性脳症との関連について)。(4)SIDSにおける心筋ミオグロビンの動向。(5)心刺戟伝導系のガングリオシド。について検討した。

上記の研究結果の概要は以下のとおりであった。

心刺戟伝導系の病理組織学的研究では、房室結節から左右脚に脂肪浸潤、中心線維体内での分岐または線維性組織と伝導系の交錯、伝導系内膜の線維弾性線維症並びに伝導系栄養動脈の内膜肥厚がみられたが、対照例でも認められた。冠動脈内膜の線維性肥厚も認められたが、SIDSに特異的変化とは言い難かった。

急性虚血性心筋障害においては心筋からのミオグロビンの逸脱が言われており、SIDS例において検索したところ、心筋ミオグロビンの逸脱している例が多く最終的に心筋の虚血性障害が発生している可能性が示唆された。

心刺戟伝導系に関する脂質生化学的研究では、心筋の糖脂質の測定に始まり、ウシの心刺戟伝導系の分離に成功し、脂質分析を行なったところガングリオシドは一般心筋と組成比が異なることが判明した。

気管支肺の病像については、(1)肺うっ血、水腫のみを主体とするもの。(2)(1)に軽度の気管支炎、細気管支炎を伴うもの。(3)(1)に軽微なびまん性肺胞内炎症性細胞浸潤がみられるもの。(4)軽度ながら間質性肺炎以外に、肝、心などにも間質炎がみられるもの。の4群に分類できた。

神経病理学的研究では、脳幹部や基底核部への侵襲が考えられており、実際に阻血性変

化あるいは低酸素性変化を示した例があったが、結論は出せなかった。今後、脳の未熟性の指標となる Cajal-Retzios 細胞等を用いて、組織化学的、免疫組織学的検索から調べていかねばならない。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



乳幼児突然死症候群(SIDS)は通常の剖検によっても有意の病像が認められないことが多い。この理由として、詳細な組織学的検索によってのみ解明できるような病変が存在しているのか、あるいは機能的障害が加わって突然死に到ったものであることが推定される。病理班としては心臓における形態学的変化を中心に、気管支、肺および中枢神経系についての研究を行ってきた。

昭和 56 年度は、(1)東京都監察医務院における SIDS 剖検例の現況。心刺戟伝導系の病理学組織学的検索と新生児、乳幼児の心筋の発達状況(3)心刺戟伝導系の脂質生化学的研究。について検討した。

昭和 57 年度は、(1)SIDS 例の心刺戟伝導系の病理組織学的検討。(2)SIDS 例の気管支肺胞系の病理組織学的検討。(3)SIDS 例の中枢神経系の発達神経病理学的立場からの病理組織学的検討。(4)心筋の糖脂質の分析。について検討した。

また、狭義の SIDS の病理学的診断基準(案)を作成した。

昭和 58 年度は、(1)乳幼児の冠動脈の内膜病変と心刺戟伝導系の関連。(2)心筋の分離秤量による右室・左室比について。(3)SIDS 本態に関する神経病理学的研究(とくに低酸素性脳症との関連について)。(4)SIDS における心筋ミオグロビンの動向。(5)心刺戟伝導系のガンダリオシド。について検討した。